

橋の上の僕

僕は橋の上に立っていた。
横には椅子が一つ置いてある。

僕はその椅子を壊した。
その椅子はノルウェー製だった。

両手で持ち上げ、地面に叩きつけていた。
脚が3つほど折れた。

僕は、下に流れている川の水を満遍なく椅子にかけた。
土も一緒に椅子に振りかけた。

一度その場から離れ、その状況を遠目で見てみると、なにか有名なオブジェのようにも見えてくる。

けれど、本当は一切そんな風には見えなかった。

単に壊れた椅子が泥まみれになっているだけ。

だけど、そんな風に思ってみると、なんとなくそう見えてきそうな気もする。

ただ、それも、そんな気がするだけ。

実際は壊れた泥だらけ椅子の何者でもない。

すると鼓笛隊が僕の脇を通り過ぎた。

太った男が鳴らすシンバルがともうるさかったので、両手で耳を塞いだ。

鼓笛隊の通り過ぎた橋の上に、壊れた泥だらけ椅子は無かった。

身動きが取れなかった。

人生の唯一の楽しみ、椅子壊しが出来なくなってしまった。

絶望していた。

叫びだしたかった。

頭の悪そうな男が嫌悪感丸出しの表情で僕の事を見ていたが、逆に睨み返してやった。

ある日、僕の家ドアが鳴った。

あの日を境に引き籠もっていた僕は、居留守をする事にした。

男の声でお礼を言ってるのが聞こえる。

僕のおかげで何かが出来たみたいだ。

ずっと叫んでいる。

あまりにもうるさいので、しぶしぶ出る事にした。

ドアの前に居たのは、あの日の頭の悪そうな男だった。

ノルウェー製の椅子に腰掛け、全身を絵の具だらけにし笑っていた。

手に持ったキャンパスには、橋の上で耳を抑え絶叫している人物が描かれていた。